

夏休み学習ゼミナールにおける英語の授業について

河合 宏文

2001年の「夏休み学習ゼミナール」では、全5回にわたって英語の授業が行われた。扱った範囲は、参加者である中学2年生の夏休み時点では未習の「現在完了形」であった。授業は、授業者の講義を中心に進む「ごく普通の」授業であった。しかし、たとえ形式的にはそうであっても、内容面では「普通」という枠にとらわれない授業を目指した。以下、私が担当した英語の授業について、1.全5回の授業内容、2.授業の特徴、3.生徒の反応、の順に見ていきたい。

1. 全5回の授業内容について

全体としての授業内容は「現在完了形」であり、各回の具体的な内容は下表の通りであった。なお、授業時間50分のうち最後の10分を確認テストに、その前の5分を各自が授業内容を見直す時間に充てたため、実質的な授業時間は35分であった。

日 程	内 容
1日目	現在完了形の導入、過去分詞、動詞の規則変化・不規則変化
2日目	これまでに習った時制（現在形・現在進行形・過去形）の復習、それらと対比しながら現在完了形の導入
3日目	>現在完了形の用法1 過去に起こったことが現在の状況に影響を及ぼしていることを表す
4日目	>現在完了形の用法2 過去のある時点で起きたことを、「時」を明確にせずを表す
5日目	>現在完了形の用法3・現在完了進行形 過去に始まり、現在も引き続いて起こっていることを表す >日本語の「～した」「～している」と英語との対応

1日目は過去分詞（特に、動詞の規則変化・不規則変化）に大きく時間を割いた。これは、現在完了形の表現に必要な過去分詞が、本授業を行う時点で未習で

あったからである。2日目は、現在形・現在進行形・過去形というこれまでに習った時制の復習に大きく時間を割いた。これは、まず各時制の働きを復習し、それらとの比較することで現在完了形の特徴が明らかになり、学習を容易にすると考えたからである。また、ここで現在進行形について取り上げたのも理由があったのである。それは、動詞には「進行形にできる動詞」・「できない動詞」があることを復習することで、5日目の現在完了進行形の導入がしやすくなると考えたためである。

3日目以降、現在完了形についてより詳しく学習していった。その際、現在完了形の用法を主な3つに分け、1日に1つずつ扱うこととした。また、このとき、現在完了形の用法の一般的な分類である「完了」・「結果」・「経験」・「継続」には取って代わらず、上記の表のような分類に基づいて授業を進めた。なぜこのような分類としたかについては、後に詳述する。最終日の5日目には、「～た」・「～ている」といった時を表す日本語表現と英語の時制との対応関係についても取り上げた。これは、現在完了形の学習が他の時制との対比によって容易になるように、英語そのものの学習においても、母語である日本語との違いを意識することが重要であると考えたからである。これに関しても、後述する。

2. 授業の特徴

本授業の特徴として、現在完了形の説明方法、英語と日本語との対比、毎回の確認テストの実施、生徒とのコミュニケーションを挙げることができる。それぞれについて、以下に見ていきたい。

(1) 現在完了形の説明方法

今回のゼミナールでは、現在完了形を「過去と現在をつなぐ働きをするもの」として説明し、具体的には以下の3つの分類に従って授業を進めた。

- ・ **過去に起こったことが現在の状況に影響を及ぼしていることを表す**

- ・ 過去のある時点で起きたことを、「時」を明確にせずを表す
- ・ 過去に始まり、現在も引き続いて起こっていることを表す

先に述べたように、現在完了形の説明は、「完了」・「結果」・「経験」・「継続」といった4つの意味・用法の分類に則ってなされるのが一般的である。しかし、これらの4用法は現在完了形が本質的に持つ意味を便宜的に具現化したものにすぎず、表面的な分類のみでは現在完了形の本質を捉えることはできない。また、こうした分類は、現在完了形の文が4用法のいずれかひとつに必ず当てはまるかのように誤解させ、機械的に当てはめさえすれば意味をとることができるような印象を持たせかねない。そこで、本授業では、現在完了形の持つ意味があいまいであることをまず強調した。そのうえで、敢えて分類するとすれば3つに分けることができるとし、教科書とは異なる分類・説明を試みた。

授業計画にあたっては、『ロングマン新英語表現辞典 Longman essential activator』（桐原書店）にある現在完了形についての説明を参考にした。この本は英語で書かれた英語表現の辞典であるが、巻末には文法事項についての簡潔な説明が、同じく英語でまとめられている。現在完了形についての簡にして要の記述を英語で読むことは、現在完了形の本質を授業者が確認するという意味において、日本語で書かれた参考書を読むことよりも有益であった。

以上のような経緯により、ゼミナールでは前述の3分類に従って現在完了形を説明した。しかし、これに対しては、従来の4分類を3つに減らしただけではいかとの指摘が容易に想像できる。その回答として、授業中に以下の2点を強調したことを挙げたい。まず1点目に、現在完了形の本質的な機能は「過去と現在をつなげる」ものであり、この3分類はその働きを大まかにわけたものにすぎないこと。2点目に、同じ英文であっても文脈によってその意味するところが変わるため、ひとつの英文を3つのうちのどれかひとつに器械的に当てはめようとするのは意味がないこと。この2点である。

5日目の説明では、本来ならば現在完了形の「継続」用法のみを説明すべきところ、まず現在完了進行形から説明し、次に「継続」用法を説明した。現在完了進行形は高校での学習範囲であるが、こちらを先に説明したほうが理解しやすいのではないかと考えたため

ある。2日目に、これまでに習った時制を復習した際、動詞には進行形にできる動詞とできない動詞があることを取り上げた。このことを踏まえて、「継続」の意味を表すには、進行形にできる動詞は現在完了進行形で、できない動詞は現在完了形で、と説明したのである。これにより、現在完了進行形とは進行形を完了形にしたもの（be doing → have been doing）であり、「進行形の状態（～している）が今までずっと続いていることを表す」という説明を行うことができた。

（2）英語と日本語との対比

当然のことながら、英語と日本語は異なる言語である。そのため、英語と日本語が1対1の対応関係をなすことはほぼないと考えたほうがよい。にもかかわらず、学習時には、英語と日本語との間にそのような対応関係が存在するかのように誤解しがちである。たとえば、「plane→飛行機」、「飛行機→plane」といったように。しかしながら、一方の「plane」には平面や水準といった意味もあれば、砲（かんな）の意味まであり、他方の「飛行機」には airplane, aeroplane, aircraft などが当てはまりうる。

1対1対応の誤解は、例としてあげた単語レベルに限らず時制表現についても存在し、誤解によって正確な学習が阻害される可能性が十分考えられる。一般に、過去形の意味は「～した」、現在進行形は「～している」とされる。しかしこの逆、つまり、「～した」は過去形、「～している」は現在進行形と覚えていると、今回のテーマであった現在完了形の学習に大きな障害となる。たとえば、今現在「本を読んでいる」ことだけを言いたいのであれば現在進行形で表されるが、今まで3時間「本を読んでいる」と言いたいのであれば現在完了進行形で表さなければならない。また、「～した」においても同様の注意が必要である。たとえば、「私はお腹が減った」（I am hungry.）は現在形だが、「私はきのうこの辞書を買った」（I bought this dictionary yesterday.）は過去形、「タクシーが到着した（今ここにいる）」（The taxi has arrived.）は現在完了形である。

時制の学習においては、英語における様々な時制表現の違いを知るだけでなく、このような日本語の表現における意味の違いを意識することもまた重要だと考える。そこで、今回の学習ゼミナールでは、現在完了形についての学習をひととおりの終えた最終日に、

日本語の「～した」「～している」と英語との対応を取り上げた。具体的には、先に挙げた例文を用いながら、日本語を機械的に英語にすること（例えば、「～した」→過去形）は不可能であり、日本語の意味する内容を理解してから英語にすることが重要であると強調した。

(3) 毎回の確認テストの実施

これは英語に限ったことではないが、今回の学習ゼミナールでは授業時間ごとに、その日の学習内容の確認テストを実施した。確認テスト実施についての意義や評価方法は歴史の授業のレポートにおいて触れられているため、ここでは英語の確認テスト作成の手続きと、確認テストを実施することの授業者にとっての意義について述べたい。

確認テストは、その日の授業内容がどれくらい理解できたかを測るものであった。テスト作成方法のひとつとして、授業中に取り上げた英文をそのまま（和訳・英訳・穴埋めといった出題形式の差はあるが）用いることが考えられる。しかしこれでは、学習内容を理解したために正解したのか、それとも英文（およびその和訳）をただ暗記したために正解できたのかを半別不可能である。そこで、毎回の確認テストの問題は、半分を授業で取り上げた英文とし、残りの半分以上を新たな英文とした。また、後者をさらに2つに分け、半分を授業中の英文と同レベルのもの、残りの半分以上をそれよりもやや難しい英文とした。この手続きを経たことで、どのレベルの学習者にとっても「歯ごたえのある」確認テストを作ることができたのではないかと考える。

確認テストは、学習者に対して理解状態のフィードバックを与えるだけでなく、授業者に対しても授業についてのフィードバックを与えるものとなる。授業のわかりやすさや、その結果としての生徒の理解状況など、授業に対する評価が授業終了とともに生徒の点数という形でなされるのである。多くの生徒が間違えた問題（おそらくは、授業者の説明が不十分であったところ）を次時の冒頭で触れることにより、授業者に対するフィードバックとしての確認テストを十分に活用することができた。

(4) 生徒とのコミュニケーション

ここでは、ゼミナール実施時に授業者と学習者間でのコミュニケーションを円滑にするために採られた試みについて触れたい。学習ゼミナールでの授業は計5回と少なく、また、生徒は授業開始直前に大学に来て、終了後すぐに帰宅してしまう（夜遅いため）とい

う制約があり、短期間でいかにして生徒と良好な関係を築くかが大変重要であった。この目的を果たすにあたり一番大きな役割を担ったのは、学習用のノートに設けた「質問シート」であろう。もちろん、この「質問シート」にはコミュニケーションを図るためだけでなく、授業内容について生徒が自由に質問できるような促す意図もあった。むしろ、そもそもの意図はこちらであった。「質問シート」の役割・意義については、歴史の授業のレポートにおいて述べられている通りである。

次に、英語の授業におけるもうひとつのコミュニケーション材料について触れたい。それは、授業者のヨーロッパ旅行記である。私事で恐縮だが、学習ゼミナールで英語の授業を担当した2001年当時、私は大学入学5年目であった。というのも、大学4年（2000年）の11月から翌年の3月にかけてヨーロッパ一人旅に出かけ、留年したためである。旅行中は、英語圏以外でもほぼ英語を使っていた。そこで、参加者に授業者の旅行話をする中で、英語を勉強することによって世界が身近になることや将来の可能性が広がることを感じ取ったり、英語を勉強する意味を考えたりする機会になれば、と思ったのである。

ゼミナール開始当初は、授業の合間に旅行の雑談をはさむことで学習者の息抜きにもなればと思っていたのだが、前述のように授業時間が35分と短いこと、話したいことが多すぎることに、授業の合間だけで紹介するには限りがあった。そこで、B5判の旅行記を前後半の2回に分けて参加者に配布した。ゼミナール初日に自己紹介をした際、授業の合間に旅行の話をしてと約束していた手前、何らかの形で生徒に伝えたいと思っていたのである。これが思わぬところからも好評を得る結果となったのだが、このことについては後述とする。

3. 生徒の反応

これまで、授業の内容や特徴について授業者の立場から述べてきた。ここでは以下の3点について、生徒や保護者からのアンケート結果をもとに考察していきたい。

(1) 授業評価に関して

以下に、学習ゼミナール終了後に行ったアンケートのうち、授業評価に関する項目とその平均点を示す。なお、アンケートの回答は1点が「まったくあてはま

らない, 5点が「とてもあてはまる」を示している。

項目内容	平均点 (SD)
英語の授業は楽しかった	3.96 (0.96)
英語の授業は勉強になった	4.44 (0.99)
英語の授業はわかりやすかった	4.03 (0.97)
またこのような授業があったら受けてみたい	4.03 (1.07)

結果から, 参加者が英語の授業を概ね肯定的に評価してくれていることがわかる。記述欄にも「わかりやすかった」と書いてくれた参加者が多かった。また, 記述回答からは, 今回の学習ゼミナールで生徒が使ったノート(授業者が自作したもので, 5日間の授業をこのノートに従って進めた)についても好評だったことがわかった(「ノートが先生が作ったヤツだから, わかりやすくして授業が受けやすかった」「例文がおもしろかった」など)。一方で, 記述回答からは今回の授業の至らぬ点についても明らかとなった。具体的には, 黒板の活用が不十分であった点や授業の進度が速かった点, 例文の英単語が難しかった点などである。35分の授業時間内に多くのことを説明しようとしたあまり, 生徒にとっては, 説明が多く, 進度の速い授業となってしまう。

また, 今回の授業では, 現在完了形についての文法的な説明や短い例文の理解が中心となり, 現在完了形を用いたそれ以外の活動(文章の読解や会話など)を行うことができなかった。そのことについての不満を挙げた生徒もいた(発音練習やスキットを入れてほしい, など)。

(2) 確認テストに関して

以下に, 確認テストに関する項目3つとそれらを総合した平均点を示す。なお, アンケートの回答は1点が「まったくそうでない」, 7点が「まったくそうである」を示している。

項目内容	平均点 (SD)
確認テストで悪い点をとらないよう意識しながら授業を受けた	4.39(1.63)
確認テストでいい点をとることを目標にして授業を受けた	4.22(1.75)
確認テストでどんな問題が出るかを考えながら授業を受けた	4.41(1.53)
授業後のテストはあったほうが良いと思う	4.45(1.71)

結果から, 毎時間の確認テストが参加者の授業姿勢に影響を与えていたことがわかる。記述回答からも,

参加者が確認テストを肯定的に評価してくれたことがわかった(「確認テストで毎回しっかり確認できた」「その日に習ったことの整理ができてよかった」など)。

一方, 確認テストの時間(10分)が短いことに対する不満も挙げられていた。テスト作成時には時間に見合った分量・難易度にしたつもりであったが, 授業者が中学英語や中学生一般の英語力を熟知していないため, 適切なレベルよりやや高めであったかもしれない。また参加者が, 習ったばかりの内容をすぐにテストされることに慣れていなかった可能性も考えられる。

(3) 授業者に関して

ここでは, アンケートの回答の中から授業者に関するものを見ていきたい。まず, ゼミナールの各教科授業者に関して, 「先生がみんなとてもやさしかった」「一生懸命僕たちにわかるよう努力してくれた」などの回答があった。また, 英語の授業者に関しては, 「発音がよかった」「喋り方がおもしろかった」「メガネを何個持ってるんですか」「授業中に同じ人ばかりあてないでほしい」などの回答があった。

今回の学習ゼミナールは, 学校でも塾でもない大学の場で行われたものであり, 授業者が好きなように授業をすることが可能であった。「好きなように」というのは, 現在完了形を教科書とは違ったやり方で説明するといった授業の内容に関わることでなく, 授業者の格好や服装についても特に制約がなかったことを意味する。メガネの個数について質問が出たのは, 授業者が日によってメガネを替え, 色つきのメガネをして授業をした日もあったからである。

授業者が配布したヨーロッパ旅行記に関して, 「おもしろかった」などの回答が多く見られた。また, 帰宅後に家族にもこの旅行記を見せた生徒がいたため, 保護者の方からも同様の回答が寄せられた。生徒以外の人の目に触れることは予期しておらず, 恥ずかしさを覚えるとともに喜びを感じた次第である。

4. 全体を通して

学習ゼミナールでの全5回の授業を大過なく終えることができた。アンケートの回答を見る限り, わかりやすい授業をすることができたと言える。参加者とのコミュニケーションについても, 質問シートの導入や, 授業者が生徒の顔と名前を覚えたことなどによりうまくいったと考えてよいだろう。

学習ゼミナールは, 学校でも塾でもない学びの場

ある。そのため、参加者にとっては学校のように評価を気にする必要がなく、また、塾のように効率や競争に追い立てられる心配のない場である。同時に子どもたちは、親や教師以外の大人（大学生・大学院生・大学教員）と関わることができ、「今勉強していることがこの先どう役に立つのか」といったことや「自分はどんな大人になるのか」といったことを考える機会にもなったと考えられる。少なくとも英語の授業者としては、海外旅行の話をする事で子どもたちの英語学習動機が少しでも高まれば、と考えていた。

これまでに述べてきた、現在完了形の説明方法や自作のノートの使用、生徒とのコミュニケーションなどのいろいろな点で、当初の目標であった普通でない授業を達成することができたのではないかと考えている。

5. 最後に

「夏休み学習ゼミナール」での英語の授業に関してこれまで私見を述べてきたが、私は英語教育の専攻でもなければ、教員免許も教育実習経験もない。そのような私に、ゼミナールで英語を教える機会を与えていただいたことに心から感謝したい。普段接する機会のない中学生に英語を教えるのは、非常に貴重な経験であった。また、授業計画立案の際には自らが英語教育の専門家ではないことを強みとしたが、これは同時に、素人の授業であったことも意味する。そのため、これまで挙げたように至らぬ点が多々あったことは事実であり、真摯に反省するものである。末筆ながら、ゼミナールの場で出会った生徒たちが今後、英語の学習を楽しんで進めていってくれば、望外の喜びである。